

多面的・多角的に考察する力を育てる社会科教育 － マンダラートとNIEを用いて －

教職実践基礎領域
澁谷樹里

I はじめに

世界は自分が思っていた以上に広く、近い。世界には様々な人種が地域によって異なる宗教・文化・伝統をもち、生活している。今日本で暮らす私たちにとって、加速するグローバル化社会に対応していくには、広い視野をもち、多様性を認め合いながら生活していくことが必要不可欠である。2020年に行われる東京オリンピック・パラリンピックに向けて日本社会はより国際化が強まり、世界が子どもたちにとって身近になってくると感じている。

教師力向上実習Ⅰ・Ⅱを行うにあたり、予測不可能で変化が激しくなるであろう社会でこれから生きていく子どもたちに、どんな力をつけさせたいかを考えたとき、広い視野をもって多様な視点や立場から物事を捉えること・表現することが必要であると考えた。

そこで、本研究のテーマを「多面的・多角的に考察する力を育てる社会科教育」とし、「授業づくり」に焦点を当てて取り組んだ成果と課題を報告する。

Ⅱ 主題設定の理由

1 今日の教育課題から

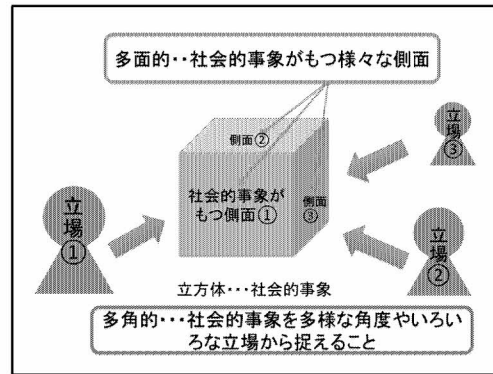
広い視野をもって社会的事象を捉えたり、考察したりする力を育むためには、多面的・多角的に考察する力を育てることが新学習指導要領においても必要であるとされているが、そのためには社会的な見方・考え方を働かせることが必要不可欠であると考えた。

(1) 多面的・多角的とは

先述でした広い視野をもつためには、このうちの「多面的・多角的に考察する力」が求められる。新学習指導要領解説において「多面的・多角的に考察する」とは、下記のようにされている。

学習対象としている社会的事象が様々な側面をもつ「多面性」と社会的事象を様々な角度から捉える「多角性」とを踏まえて考察することを意味している。

多面性とは、図1にあるように立方体を社会的事象と例えた場合、その立方体が複数の側面を指す。それは社会的事象を捉える視点によって、側面（経済面・生活面・社会面などが異なることを表す。一方、多角性とは図1の社会的事象の立方体を外から見る人の様々な立場のことを示し、社会的事象を捉える際の多様な角度や様々な立場に立って考えることである。これらを踏まえて考察し、理解することが社会科の授業において求められると考える。



【図1 社会的事象を多面的・多角的に捉えるイメージ】

(2) 考察することについて

また、澤井(2017)は新学習指導要領で新たに整理された資質・能力の一つ「思考力・判断力・表現力等」のうち思考力を以下のように述べている。

思考力を「考察する力」とし、多面的・多角的な考察や概念の活用を基軸としている。

つまり「思考力」には社会的事象の意味や意義、特色や相互の関連をしていくことが求められていると言える。「考察する力」を育てるには、多面的・多角的な考察や概念の活用を促す手立てが必要である。

(3) 「社会的な見方・考え方」との関わりについて

多面的・多角的に考察する力の育成には、「社会的な見方・考え方」を働かせることが必要である。社会的事象の意味や意義を理解するだけではなく、それらがなぜそのような特色をもち、関連しているかなどといった、知識を活用することが求められている。「見方・考え方を働かせること」は平成29年3月に公示された新学習指導要領に教科としても本質的な学びとして明示されている。

多面的・多角的に考察する力の育成には、社会的な見方・考え方を身に付け、働かせる必要がある。「社会的な見方・考え方」とは、社会的事象等の意味や意義、特色や相互の関連を考えたり、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて構想したりする際の「視点や方法（考え方）」である。

社会的事象の意味や意義、特色や相互の関連を考えることは、多面的・多角的な考察することに必要な力である。「社会的な見方・考え方」を身に付け、統合的に働かせるために、表現することを促す手立てを工夫することが重要になる。

このことから、多面的・多角的に考察するためには、社会的事象を様々な面や視点から捉えた上で思考を整理し外化させる工夫と社会的な見方・考え方を働かせ、表現するための工夫が必要であると考え。

そこで思考を引き出す手立てとしてマンダラート、「見方・考え方」を働かせ表現するための手立てとして「NIE 活用」を用いることにした。

2 連携協力校の生徒の実態から

(1) 調査対象

名古屋市公立中学校 第1学年 23 名

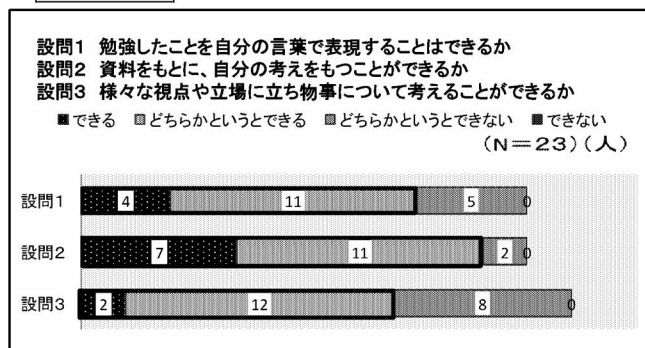
(2) 生徒の様子

単学級で生徒数が少ないということもあり、全体的に男女仲が良く自由な発言がしやすい学級である。どの生徒も小学校からの学習が積み重ねられており、豊富な知識をもち、社会的事象に関心も高い。しかし、一つの社会的事象に対して考えるとき、一面的に考える傾向が見られる。生徒には自身がもつ多くの情報を整理して、多面的に捉えてほしい。さらに、自身の視点だけでなく様々な立場から多角的に社会的事象を考えることができるようになってほしいと考えた。

(3) 質問紙による調査結果

生徒の日頃の思考や判断、表現に対する意識調査及び習得事項の活用力に対する自由記述調査を実施した。

質問紙調査

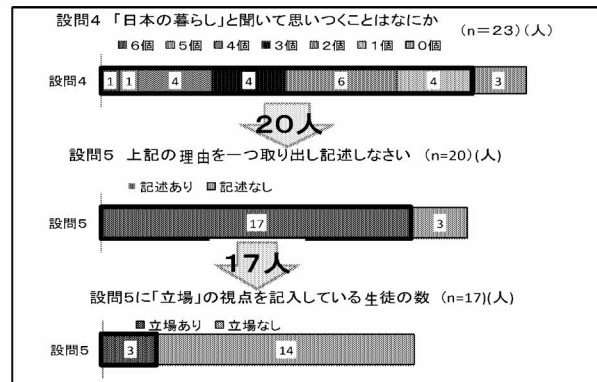


【図2 実践前アンケート結果】

【設問1】では約7割、【設問2】では約8割の生徒が、資料の読み取りや、学習をしたことなど自分のなかにある既存の知識をもとに自分の考えをもったり、自分の言葉で表現したりすることはできる、あるいは得意であるという意識をもっている。【設問3】では「できない」と答えた生徒はひとりもおらず、少なからず生徒自身の中に様々な視点や立場ということを意識して考えることができていると感じていることが分かる。

自由記述調査

【設問4】は、小学校までの学習や既存の知識を活用し、社会的事象について自分の考えをどれだけの多面性をもって書くことができるかを調べるものである。キーワードで、5分間でいくつ書くことができるかを調査した。また、【設問5】ではそのキーワードのなかから一つ取り上げ理由を書かせた。図3はそれを集計したものである。



【図3 「日本の暮らし」について自由記述調査結果】

23 人中 20 人の生徒が、「日本の暮らし」について一つ以上書くことができ、平均は約 2.35 個だった。【設問4】を記入できた生徒 20 人中【設問5】を記入することができた生徒は 17 人であった。しかし根拠を記入することができた 17 人を「立場」という視点から分析すると、「他国」や「世界」と比較したり、関連したりしながら表現しようとしている生徒は、17 人中 3 名のみであった。

以上のことから、授業で学習を終えた内容に関しては、自分の考えをもったり表現したりすることはできるという意識はあるが、初めて出会う社会的事象に対して、自分の考えや予想を広げること、様々な視点や立場に立って考えることが苦手であるということが考えられる。

3 目指す子ども像

今日的な教育課題及び連携協力校の生徒の実態から、自分たちが暮らす名古屋・日本国内のみならず、国際社会に生きる社会一員としての広い視野を育てたい。中でも社会的事象を多面的・多角的に捉え、考え調べ、表現することができる生徒を育てたいと考えた。

そこで本研究の目指す生徒像を次のように設定する。

自身のもつ知識や経験を活かして、社会的事象を多面的・多角的に考察することができる生徒

Ⅲ 研究の仮説と手立て

1 研究の仮説

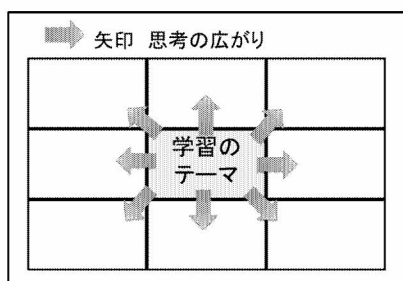
中学校社会科地理的分野において、学習過程でマンダラートを用いて既存の知識や単元学習内容の整理・外化を行い、NIE 活用を通じて最終表現物であるまとめ新聞に自身の考えを記述させることで多面的・多角的に考察する力が育つだろう。

2 手立て

(1) マンダラート

考察する力を引き出す手立てとして、マンダラートを取り入れ、思考を整理・外化する。マンダラートは今泉浩晃によって 1987 年に考案された発想法の一種である。紙に 9 マス用意し、中心に考えるテーマを記入しそれに関することについてキーワードで残りの 8 マスを埋めていく。今回マンダラートを用いる上での

思考の整理とは、8マスに記入するために、自身の考えを精選し8個に厳選することとする。思考の外化とは、自分の考えや既習事項など、自分内側にあるものを可視化することとする。



【図4 マンダラート】

今泉（2004）によれば、私たち人間の「思考」は、展開し、収束するという行為を繰り返している。マンダラートの形は「思考のカタチ」を示しており、中心の1つと周辺の8つのマス＝セル（細胞）からなる。中心に考えるテーマを置き、それについての情報や知識を中心に沿わせて集めることは、中心のテーマを「展開」することになる。「展開」された内容の中からどれか1つを選択したり、いくつかをまとめたりして収束させ結論を出す。さらに今泉はワーキングメモリについて次のように述べている。

思考に使われる脳の「記憶容量」ワーキングメモリは、すぐに消えてしまうと大脳生理学ではいう。一度に扱える情報量もわずか〔7±1〕だ。〔7±1〕というのは、6ないし8ということで、この8という最大値は、なんらかの工夫をした場合にのみ、という注釈がつくほどだ。簡単に言えば、人間は一度に6つ、最大でも8つまでの情報しか扱えない。

このことから、8つのマスは、思考にとって最大値であることが分かる。学習の中で、残りの8マスを必ず埋めなくてはならないという作業を行うことで、「思考の幅を広げること」「新しい切り口から問題を見ること」が可能になる。8マスに「展開」された思考を、「収束」に向けて一つ取り上げて深く考えたり、他のマスと関連付けたりすることで、考えを整理・外化し、さらに思考を深めていくことができる。

アンケート調査の結果、一人で8マスを埋めるのは中学校1年の発達段階において難しい。そこで、仲間とともに対話しながら8マスを埋めるために様々な意見や考えを聞かせることで、これまで自分になかった新たな視点に気付くことができると考える。

(2) NIE 活用 (Newspaper in Education)

社会的な見方・考え方を表現するための手立てとしてNIE活用を取り入れることにした。

多様なフィールド実習において、中日新聞社を訪問し、以下のことについて学んだ。NIEとは、Newspaper in Education (教育に新聞を)の略で、新聞を生きた教材として教育に活用する運動のことである。教育のなかに新聞を用いることで、児童生徒の社会への関心を高め、新聞を読むことで情報を「読み解く力」、「考える力」、問題を「解決する力」を育てることなどが目的とされた活動だ。資料の一つとして新聞記事を用いた

り、記事を読んだり新聞の機能理解をするという活動を行うことで、社会的事象等の様子や仕組み、課題等を見出し、社会的事象の意味や意義、特色、関連を把握する力の育成が期待できるのだということを学んだ。これは、「社会的な見方・考え方」を働かせ、表現するために効果的であると考ええる。

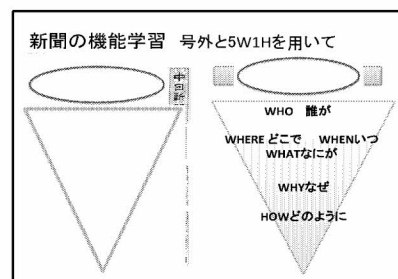
また、NIEの活用で求めているのは知識の習得だけではなく、課題に直面した際に様々な知識を活用し探求する力の育成である。NIE活動を推進している土屋（2017）によるとNIEの活用方法には、おおまかに3分野ある。

- ①新聞製作学習（新聞に学ぶ）
- ②新聞活用学習（新聞で学ぶ）
- ③新聞機能学習（新聞を学ぶ）

①新聞製作学習（新聞に学ぶ）は、学習のまとめや表現として、調べたことや学んだことを新聞にまとめていく学習である。新聞の種類も個人新聞からグループで作るものまで多種多様であり、内容も学習新聞や見学新聞など、あらゆる教科や学習の場で活用することができる。②新聞活用学習（新聞で学ぶ）では、新聞を学習の補助的な教材として提示したり、資料として活用したりする学習である。新聞を活用することは、まさに新聞で学ぶことなのである。③新聞機能学習（新聞を学ぶ）では、新聞記者をゲストティーチャーとして招聘し、記者の仕事について学んだり、新聞発行までの過程や新聞紙面について学んだりして、新聞そのものを学ぶ学習である。

今回の実践では、単元のまとめの最終表現物作成のために、主に①新聞製作学習を中心におこない、「社会的な見方・考え方」を働かせ表現することを促す手立てとした。まとめ新聞の作成を行なうことは、社会的事象の様々な側面を捉えることや、その側面をさらに広げることにつながり様々な角度やいろいろな立場から社会的事象を考察することができるはずだ。単元の終わりに、自分の興味・関心に対して単元学習だけでなく調べ学習を行い、資料や事実に基づいて新聞紙面の構成を用いたまとめ新聞を作成することで、社会的事象を多面的・多角的に捉え考察し情報を取捨選択する力を育成できると考える。

また、教師力向上実習Ⅰでは図5の機能学習を行い、実習Ⅱでは「見出し」という要素に着目した②新聞活用学習も行った。新聞記事を読んでもらうにはどのような見出しが興味を引くか、新聞

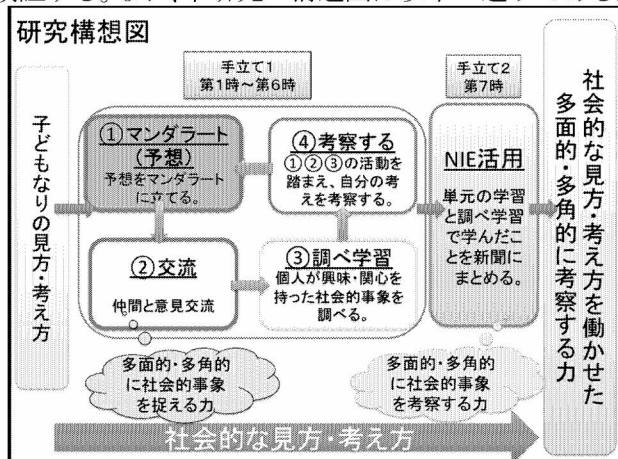


【図5 新聞を用いた機能学習の例】

の読み手の立場に立って考えることで、自分が伝えたい内容をより魅力的に伝える工夫ができると考える。

3 研究構想図

目指す生徒の姿に迫るために、手立て①「マンダラート」と、手立て②NIE 活用を軸に単元を構成する。この単元のなかで、先述した仮説と手立てを位置付け、社会科の授業実践を行い、手立てが有効であったかを検証する。なお、本研究の構造図は以下の通りである。



【図6 研究構想図】

4 手立てを位置付けた基本的な授業の流れ

手立て①では、マンダラートを用いて思考を広げ、多面的・多角的に社会的事象を捉える力の育成を目指す。手立て②では、①を踏まえて、まとめ新聞の作成を通して多面的・多角的に社会的事象を考察する力の育成を目指す。

5 検証項目

本研究において、次の2点を検証項目に設定する。

(1) 検証項目1 マンダラート

手立て①のマンダラートが有効であったかを確認するために各授業での記述やまとめ新聞から検証する。

(2) 検証項目2 NIE 活用

手立て②のNIE 活用が有効であったか、まとめ新聞から検証する。

IV 実践研究の報告（教師力向上実習Ⅰ）

1 教師力向上実習Ⅰの実践

対象：名古屋市立中学校 第1学年24名
期間：平成29年5月8日～6月2日
単元：社会科地理分野『人々の暮らしと環境』

2 実践計画

(1) 単元について

実習Ⅰでは、社会科地理的分野『第2章 人々の暮らしと環境』で実践した。さまざまな気候帯の特徴とそこで生活する人々の暮らしはどのように関連しているかを学習する。本単元の目標は世界の自然環境と人々の生活の多様性を捉え、自然的条件や社会的条件などに対応した各地の人々の生活の様子を理解できるようにすることである。学習課題を「気候とその地域に住む人々の暮らしはどう関わっているのか」とし、まとめ新聞のテーマを「気候に合わせた人々の暮らし

を紹介しよう！」と設定した。

(2) 単元計画

学習活動	マンダラート
1 植物の少ない乾いた世界 ・乾燥帯の暮らしについてマンダラートに予想を立てる。	☆出会い
2 地域によって気候が変わる ・前時でマンダラートに記入した項目から視点を振り返り、今後の学習での視点を統一する。	☆活用するための視点の整理
3 赤道に沿った暑い世界 ・熱帯気候の地域の様子を資料やグラフから読み取りマンダラートにまとめる。	☆活用
4 氷と白夜の世界 ・マンダラートに特徴をまとめる。 ・仲間とともにマンダラートを共有し、理解を深める。	
5 標高が高く空気の薄い世界 ・高地の暮らしをマンダラートに予想し、仲間と共有する。共有したものを活かし、グループで一つのマンダラートを作成する。	
6 季節の変化が明らかな世界 ・温帯の特色をマンダラートを活用し、自分の言葉でまとめる。	
7 学習のまとめと表現 ・マンダラートとプリントなどを活用し、自分の興味をもった世界各地の人々の生活の特色を新聞にまとめる。	○まとめ新聞作成

【図7 実習Ⅰ単元構想図】

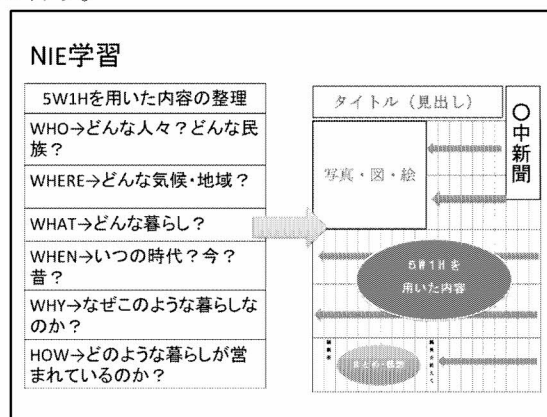
(3) 手立てについて

手立て①マンダラート

本実践では、主にマンダラートの外化の点を使用し、6回の授業でマンダラートを用いる。第1時ではマンダラートとの出会い、第2時では、マンダラートの活用の方法を学ぶために、マンダラートを書くための視点の整理を行う。資料から読み取れることや学習した内容を、整理した視点に照らし合わせながらマンダラートを作成させる。これを基に第4～6時では、予想を広げるためにマンダラートを用い、グループで共有し1つのマンダラートを作成し発表する。内容の確認を行い、それを踏まえ、毎時間ごとに本時のまとめを文章に書くことに活用していく。

手立て②NIE 活用

考察する場面を設けるためにNIE 活用の①新聞製作学習を行う。まとめ新聞のテーマ「気候に合わせた人々の暮らしを紹介しよう！」に沿って各自調べ学習を行う。号外新聞を用いて5W1Hを基本とした新聞の構成の確認を行い、調べ学習した内容を5W1Hに当てはめて整理をする。これを用い、まとめ新聞の作成を行う。



【図9 NIE 学習の例】

3 実践の結果と考察

(1) マンダラートについて

【実践の結果】

〈授業の様子（第2時）〉

第2時では、マンダラートの扱い方の確認とマンダラートを記入する際の視点の統一を行った。生徒とともに作成し、空いたマスは自分独自の視点を書くこととした。(図8) これを行うことで、今後マンダラートを用いる際の視点の統一がされた。

衣	食	住
今と昔 の変化	テーマ	技術
		仕事

【図8 統一された視点】

〈授業の様子（第6時）〉

第6時では、ヨーロッパ諸国に着目し、日本と同じ「温帯」でも地域によって異なる特色をもつことを学習した。「ヨーロッパの暮らし」について、授業の初めに個人でマンダラートに予想した。(図9) 第1時には、なかなかマスが埋まらなかった生徒が、整理した視点を用いたことやマンダラートの扱いに慣れてきたことによって、徐々に書くことができるようになってきた。その後仲間と意見を交流し、グループで一つマンダラートを作成した(図10)。第2時で整理した視点以外の「祭り」や「交通」などといった自分の生活と関わら

あたたかい日差しが日常の生活に活用されている。バスなどを利用している。	ヨーロッパの暮らし(予想)

【図9 生徒A 個人で作成したマンダラート】



【図10 関わり合いの様子】

せた独自の視点を用いながら交流することができた。これを全体で発表し、グループ交流や他のグループ発表を踏まえ、もう一度自分のマンダラートの埋まっていない部分を埋めるといった活動をした。関わり合い後に作成したマンダラートは図11の通りである。生徒Aは、関わり合いで得た新たに6個の面を書くことができた。ヨーロッパの暮らしについて気候の特色を踏まえながら確認し文章にまとめた(図12)。

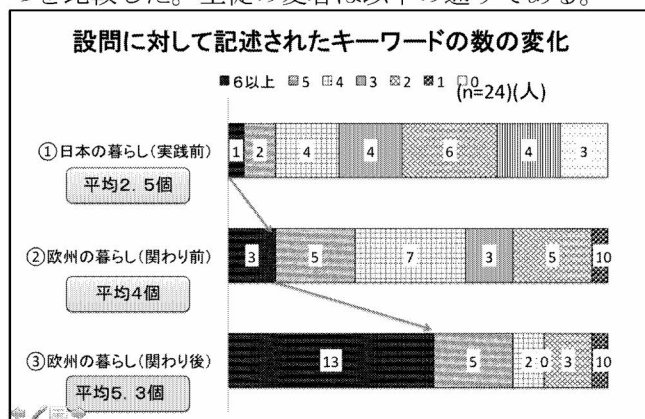
あたたかい日差しが日常の生活に活用されている。バスなどを利用している。	ヨーロッパの暮らし(予想)	技術が発達している。都市にたくさんの人が住み、ホームレスやホームレスに近い生活をしている。
日本に近い感じ	ヨーロッパの暮らし(予想)	日常の生活はあまり変わらない。
祭りが多い	昔の建物	家畜が多い

【図11 生徒A 関わり合い後に作成したマンダラート】

ヨーロッパの緯度の高い地域の人々は日光が当たりにくい地域なので少しでも天気の良い日だと川ぞいに砂をしき日光浴を楽しんでいることが分かった。反対に日光がよく当たる地域の人々は日光を避けるため家や生活の仕方を工夫していることが分かった。

【図12 生徒A ヨーロッパの暮らしのまとめの記述】

実践前に実施した「日本の暮らしについて思いつくこと」〔①日本の暮らし(実践前)〕と、第6時に作成した「ヨーロッパについて思いつくこと」について作成したマンダラートのうち個人で作成したもの〔②欧州の暮らし(関わり前)〕と、グループで関わり合い後に作成したもの〔③欧州の暮らし(関わり後)〕の三つを比較した。生徒の変容は以下の通りである。



【図13 実習I 記述されたキーワード数の変化】

【実践の考察】

図13のように、マンダラートに個人で立てた予想をグループで共有することで、思考の広がりが見られた。数字だけ見ると〔①日本の暮らし〕の予想がでは上記のとおり平均2.5個回答していた。次に本実践で「欧州の暮らし」について個人で予想を立てた結果は、平均4個記入することができた。6個以上記入できていた生徒は1名から3名に増加し、1つ以下の生徒は1名と減少した。個人で予想を立てた後、「関わり合い」をグループで行い、良いと思った意見を参考にし、マンダラートを作成した〔③欧州の暮らし(関わり合い後)〕では、記入された数が平均5.5個に上昇した。六つ以上記入できた生徒も12人と増加し、8個全て記入できた生徒は6名となった。また、交流することにより、新たに得た視点が反映され衣食住の視点や農業・工業といった職業の視点、といった第2時で整理した視点だけでなく、具体的に新たな視点をもって予想を立てることができていた。実践前は全体的に「和風」や「和食」などといった抽象的な内容が多かったのに対し、「レンガ造りの家」や「小麦を使った食事」などといった具体的な予想を立てることができた。以上のことから思考が一人のみで広がるのではなく、他者との関わり合いによってより広がりが見られるということが分かった。授業の最後に行ったまとめの文章には、ヨーロッパで暮らす人々の様々な側面、習慣や農業、住

居の工夫、気候などに対する記述が多く見られた。生徒Aはヨーロッパで暮らす人々の視点を図12の下線部の日照時間の短い地域の人と長い地域の人に着目し、多角的に表現した。またこれは、関わり合い前には見られなかった視点であり、生徒Aが新たに得た視点を用いていることが分かる。仲間との関わり合いによって得た視点を用いて、多面的・多角的な考察が見られたと考える。

しかし、マンダラートに立てた予想が正しかったか、授業で取り扱わなかった分野に関しては確認することができず、図12の生徒Aの記述にマンダラートの内容が一つしか反映されていないように、立てた予想を基に考察することができない生徒も多くいた。中心に置くテーマが広すぎることによって予想が広がりすぎてしまい、時間内に扱うことができなかったことが課題である。予想を確認するために、授業の中で教師が教える時間だけでなく、生徒自身で調べ、自分の予想を解決する時間を設けることが必要であったと考える。

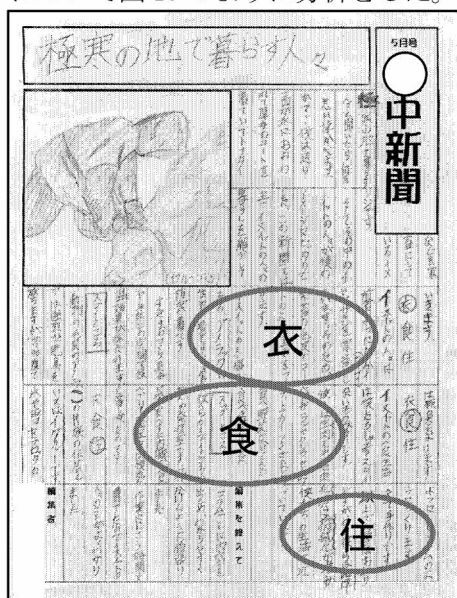
(2) NIE 活用について

【実践の結果】

〈授業の様子（第7時）〉

まとめ新聞のテーマ「気候に合わせた人々の暮らしを紹介しよう！」に対して自分の興味・関心をもったことを新聞にまとめた。自身で調べてきたことや教科書などを活用しまとめる作業を積極的に行うことができていた。授業で取り扱った「イヌイット」を含めた冷・寒帯の地域をまとめる姿が多く見られ、これは授業の中でも特に興味・関心をもたせることができていた内容であるため、教材研究の大切さを改めて感じることができた。

「冷・寒帯」の暮らしや、「熱帯」の暮らしなど各自で設定したテーマに対し、多面性を食事面・住居面の・伝統文化・衣装面・気候面などの要素がいくつか含まれているかについて図15のように分析をした。



【図15 まとめ新聞の評価の例】

まとめ新聞に表された多面性に対し多角性を、新聞に内容を客観的に捉えた視点に加え、日本との比較・類似国との比較、そこで暮らす民族から捉える視点や立場がいくつ含まれているかについて検証した。以下が検証の結果である。

(n=24) (人)					
	1面	2面	3面	4面	5面以上
多面性	2	6	11	4	1
	1視点	2視点	3視点	4視点	5視点以上
多角性	20	2	0	2	0
多面性 平均2.8要素			多角性 平均1.3要素		

【図16 まとめ新聞に表現された多面性と多角性の数】

【実践の考察】

多面性は3要素以上書くことができていた生徒が24人中16人いた。一つの社会的事象に対し、様々な側面を考察することができたのは成果である。マンダラートで視点を整理したことは、新聞に書く際の視点を与えることにつながり、多面性を捉えた上で新聞に表現することにつながったと考える。

しかし、他の地域との比較やその地域に暮らす人の視点、客観的に見たその地域への視点といった多角性を三つ以上表現することができた生徒は24人中2人のみであった。教科書や資料から調べたことが客観的に述べられているのみであり、そこで暮らす人々の思いや考え、それに対する自分の考えが表現されていなかった。多角性が表れなかったことは、「気候に合わせた人々の暮らし」というテーマを設定したことに課題があると考えられる。「気候に合わせた人々の暮らし」という広い範囲の社会的事象の中の、寒帯や熱帯といった大きな枠を捉えた側面、イヌイットなどの民族という視点から生徒は捉えたのだと考える。社会的事象を何に設定するかというまとめ新聞のテーマ設定が課題である。

(3) 成果と課題

前述の結果から、マンダラートを用いることで、社会的事象に対し、多面的・多角的に考察することにある一定の効果が得られた。これは第2時で視点の統一を行ったことと、グループでの関わり合いの時間が効果的であったと考えられる。しかし、マンダラートを予想に用いたことで、マンダラートとまとめ文章の関連性が薄くなってしまったことにより、多面的に社会的事象を捉えることができて、多角性が狭まってしまったことが課題である。

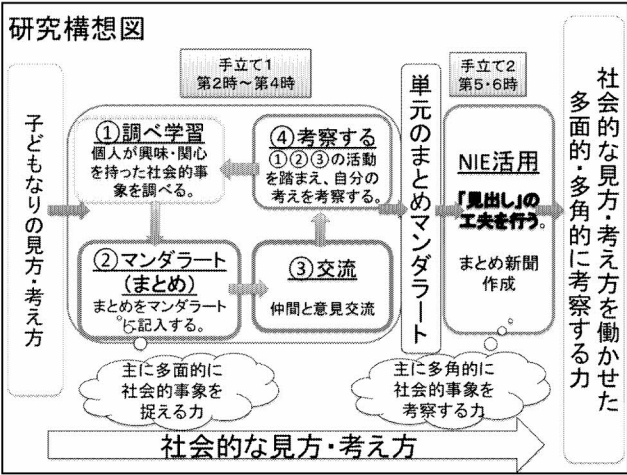
また、まとめ新聞にも統一した視点が用いられ、多面的に考察することによる一定の効果が得られたが、多角性が表現されなかったことには課題である。

マンダラートにもまとめ新聞と同様に多面性と多角性が表現されると実践前は考えていたが、どちらも

多角性が表現されにくかった。手立て①マンダラートだけでも、手立て②NIE 活用のまとめ新聞作成だけでも多角性を育成することは難しい。二つの手立ての連携と多角性の考察が表現されるような手立ての改善が求められる。

V 教師力向上実習Ⅰの課題からの改善

1 研究構想図



【図 17 実習Ⅱ 研究構想図】

2 マンダラートについて (主に多面的)

実習Ⅰでは、マンダラートも使い方によっては、多面性と多角性が混同してしまうことがあるということが分かった。そのため実習Ⅱでは、学習の終わりに学んだことで重要だと感じたことをまとめるためにマンダラートを使用する。主に多面的に捉えるためにマンダラートを活用し、これを活かしてまとめ新聞を作成する。その際には多角的な視点をもって多面性をもう一度見直すことが必要だ。そのため、考察の段階でマンダラートを活用し、中心のマスに置くテーマを、学習対象を多角的に捉えることができるような言葉を置く。新聞とマンダラートの直接的な関わりがなく、新聞を作成していたので、新聞に多面性を反映できるようなマンダラートの作成も行う。マンダラートで整理した多面性を活用することで、社会的事象を1つの視点や立場だけでなく、様々な視点や立場から特徴を理解し、自分の言葉で情報を表現することができるようにしていく。

3 NIE 活用について (主に多角的)

まとめ新聞については、実習Ⅰと同様に実習Ⅱでも最終表現物として作成する。テーマが広すぎたために多面性のみが表れていたのが、テーマを「探れ！アフリカの謎」と地域を狭めて設定する。

また、実習ⅠとⅡの間に行われた多様なフィールド実習で訪問した際、中日新聞 NIE 事務局の方々に②新聞活用学習の「見出し」に着目させることを勧められた。読み手の視点に立ち、読みたくなるような見出しの工夫を行うことで、自分が一番伝えたい内容を精選することができるようにしていく。

マンダラート活用の場面、マンダラートと NIE 活用の連携、まとめ新聞のテーマを狭めること、「見出し」

の工夫の4点を実習Ⅱでは改善する。

VI 実践研究の報告 (教師力向上実習Ⅱ)

1 教師力向上実習Ⅱの実践

対象：名古屋公立中学校 第1学年 24名
期間：平成29年9月25日～10月20日
単元：社会科地理分野『アフリカの人々の暮らしとその変化』

2 実践計画

(1) 単元について

社会科地理的分野『アフリカの人々の暮らしとその変化』で実践した。日本で暮らす生徒にとってアフリカ州は馴染みが薄いため、アフリカの地域を大観し、その上でその人々の暮らしとその変化について地域的特色を理解することを目標とする。単元を貫く学習課題を「探れ！アフリカのなぞ！」に設定した。アフリカで暮らす人々はどうの歴史を経て、現在どのような暮らしをしているのかについて、歴史的背景・農産業・経済の三つの分野に着目し学習を行った。

(2) 単元計画

学習活動	マンダラート
1 アフリカをながめて ・アフリカ州の位置や特色について理解する。	
2 アフリカの歩みと多様な民族 ・アフリカの歴史について学習したことで、アフリカの歴史にとって重要だと感じることをマンダラートに記入する。これを仲間と交流する。	☆活用
3 伝統的な農業と今 ・アフリカの農業について学習したことで、アフリカの農業にとって重要だと感じることをマンダラートに記入する。これを仲間と交流する。	
4 変わる人々の暮らし ・アフリカの暮らしの変化について学習したことで、アフリカの暮らしで重要だと感じることをマンダラートに記入する。これを仲間と交流する。	
5 学習のまとめと表現 ・新聞記事に見出しをつける練習をしながら、新聞における「見出し」の意味について理解する。	☆「見出し」の作成
6 学習のまとめと表現 ・マンダラートとプリントなどを活用し、自分の興味をもったアフリカの人々の生活の特色を新聞にまとめる。	☆まとめ新聞作成

【図 18 実習Ⅱ 単元構想図】

(3) 手立てについて

手立て①マンダラート

実習Ⅱでは、思考を整理するために、授業の終末に学習のまとめとしてマンダラートを作成する。第2時からマンダラートの活用し、学習を踏まえ自分にとって「アフリカの〇〇にとって重要だったことはなにか」をマンダラートに記入し、それを基に考えをグループで共有し、埋まらなかったマス埋めるという活動を第2～4時で行う。そのマンダラートを基に自分の言葉で学習をまとめる。第4時では、「アフリカ州と聞いて連想することはなにか」について第1時から第4時の学習を踏まえ、マンダラートに記入し、まとめ新聞の作成に用いる。

手立て②NIE 活用

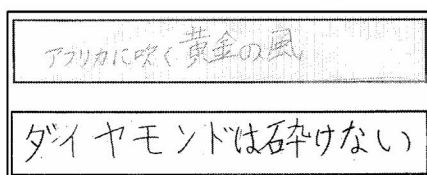
第6時に「見出しの工夫」を行う。実際の新聞記事を用いて、見出しをつける練習をし、「見出し」を作る際の四つのポイント「正確・簡潔・明解・魅力」を

ったため「カカオ」や「なつめやし」などの農作物の名前がマンダラートに記入されていた。学習した内容がまとめの文章に反映されないことがあるということがわかり、中心のテーマにどのようなキーワードを入れるかについて課題となった。

(2) NIE 活用について

【実践の結果】

「見出しの工夫」をさせるために、実際の新聞記事を使って、見出しを考える工夫を行った。実際の記事の見出しと見比べても、遜色なく作成することが出来ており、見出しを考える自信につながったようである。まとめ新聞のテーマ「探れ！アフリカの謎！」に対して自分の興味・関心をもったことを新聞にまとめた。工夫された見出しは右記の通りである。



【図 23 工夫された見出し】

実習Ⅱでは、実習Ⅰと同様にアフリカ州に関係する各自で設定したテーマに対し、多面的な要素がいくつ含まれているか分析を行った。また、新聞に内容を客観的に捉えた視点に加え、日本との比較・類似国との比較、そこで暮らす民族から捉える視点や立場といった多角的な要素がいくつ含まれているかについて検証した。以下が検証の結果である。

(n=24) (人)					
	1面	2面	3面	4面	5面以上
多面性	2	6	11	4	1
	1視点	2視点	3視点	4視点	5視点以上
多角性	20	2	0	2	0
多面性 平均2.8要素			多角性 平均1.3要素		
	1面	2面	3面	4面	5面以上
多面性	1	11	9	1	2
	1視点	2視点	3視点	4視点	5視点以上
多角性	0	2	2	14	6
多面性 平均2.7要素			多面性 平均4.1要素		

【図 25 NIE に反映された多面性・多角性の変化】

【実践の考察】

「見出し」の工夫に取り組んだことにより、自分の書きたい内容を精選し、「見出し」と新聞の内容がつながりをもって書くことが全員出来ていた。見出しの工夫が出来ていた生徒は24人中14人、自分の思いや考えなど内容の深まりが見られた生徒は24人中15人いた。「見出し」の工夫をすることは多面的・多角的に社会的事象を捉え、伝えたい内容を整理することに効果があったと考える。

アフリカ州という社会的事象に対し、「アパルトヘイト」や「人種差別」、「豊富な資源」などといった多面性を3要素以上捉えることが出来た生徒は24人中12人おり、平均2.7要素と、実践Ⅰよりも減少した。しかし、「客観的な視点」のみならず「ヨーロッパ人」「黒

人」「白人」などの多角的な視点から4要素以上記入することができていた生徒が24人中20人おり、平均4.1要素と実習Ⅰより1.8要素多く捉えることができた。多面性は減少したが、多角性が増加したことは、一つの側面に対して多くの視点や立場から記入することができていたということであると考え。また、一つの面を多角的に考察することで、新たな一面に気がつくことができ他面とのつながりや関連性について理解を深めることができていた。マンダラートでアフリカという社会的事象について多面的に捉えたことを新聞に反映させたことによって、一つの面に対して多角的に考察することにつながったと考える。以上のことから、多面的・多角的に考察するためにNIEを活用しまとめ新聞を作成することはある一定の効果が得られたと考える。

(3) 成果と課題

マンダラート活用場面を学習内容のまとめに用いたことで、社会的事象を多面的に捉え、内容を整理することにつながった。また、整理されたマンダラートをまとめ新聞に反映させたことと、まとめ新聞のテーマを狭めたことで、社会的事象の多面性と多角的に関連づけながら考察することで新たな一面に気がつき、さらに多面性と多角性を関連づけるという「社会的な見方・考え方」を働かせながら表現することができた。さらに「見出しの工夫」により、内容の整理と精選がされた。実習Ⅰから改善した4点は多面的・多角的な考察に有効であったと考える。

しかし、マンダラートの中心に置く言葉が曖昧であると、生徒が何を書いたら良いか分からず授業内容の整理には繋がらないということが分かった。マンダラートの中心に置くキーワードについて課題である。また、まとめ新聞には、教科書や調べ学習で得た事実の羅列がされている生徒が多く、自分の意見や考えが反映されておらず感想文になってしまったことが課題である。調べたことをまとめるだけでなく、そこから生徒が何を心得、どのようなことを考えるかが重要であるため、自分の考えや思いを読み手に伝えるという新聞としての機能をもたせることも課題の一つである。

Ⅶ 実践研究のまとめ

1 研究の成果と課題

(1) 手立て①マンダラート

研究全体を通じて、マンダラートを手立てとして用いたことで、二つの活用法があることが分かった。一つは実習Ⅰで行った考えを広げる方法で、この場合には直接考察には繋がらないが、考えを広げた上で学びに取り組むことができる良さがあることが分かった。実習Ⅱではマンダラートを学習内容の整理に用いることで、多面的・多角的な考察にはつながったが、自身の考えを広げることに余地はなくなる。自分の中から、考えを引出すマンダラート本来の活用法とは異なる。自分の考えを引き出していく場面には、実習Ⅰでの活用法が必要であり、学んだことの整理をして、考えを

まとめていく場合には実習Ⅱでの活用法が有効である。どちらもそれぞれ良さがあり、課題があるため状況や場面に合わせて、活用法を変えていくことが必要であるということが分かった。

また、マンダラートの空白を広げるために考え、関わり合うことによって考えが広がる。マンダラートを一人の力で作成するだけでは思考の幅が広がるわけではなく、自身で考える時間と仲間と関わり合いの時間、さらにもう一度自分で考える時間を設けることによって、マンダラートがより有効なツールとなることが明らかになった。

しかし、9マスの中心に具体的なキーワードを置くようにさせるかが非常に重要であることが分かった。教材研究だけでなく、生徒の実態に合わせて、どの生徒が扱っても扱いやすいマンダラートにしていけることが必要である。

時間の都合上使用できなかったが、マンダラートは他にも、9マスのマンダラートを81マスまで広げたり、二つのマンダラートを比較したり、と様々な活用する方法がある。この考え方を利用してより思考を広げるツールとして社会科地理分野だけでなく、幅広い分野でマンダラートが活用できるようさらに工夫を重ねていきたい。

(2) 手立て②NIE活用

本実践では、①新聞製作学習を活用した。学習のまとめとしてのNIE活用は一定程度効果を得られたと思う。しかしそのためには、自分の考えをある程度まとめた上で取り組めるマンダラートとの組み合わせが重要であるということが分かってきた。また、新聞には②新聞活用学習や③新聞機能学習の活用法がある。今回は取り組めなかったが、②や③の活用法を取り入れた上でまとめ新聞を作成するといった方法も研究していきたい。

一方で、まとめ新聞に「編集を終えて」という欄を設けたが、この欄の記述は感想文になってしまいがちであった。教師の意図が正しく伝わっていなかったことが反省である。立場を考えて記入するという指導が必要であったと考える。この欄を活用することができれば、自分の考えにより深まりが見られたのではないかと考える。

NIEは新聞を作成する活動だけではない。社会科だからこそ、社会的事象を新聞記事から読み取ったり、そこから何かを考えたりといった活動も多面的・多角的な考察には有効な活動であると考え。取り扱う社会的事象に合った記事を探すことが、難しく時間を要することが分かった。計画的・意図的に準備が必要であり、実習Ⅰ・Ⅱで用いることができなかったことは私自身の研究不足であり、課題である。

最後に、実習ⅡではマンダラートとNIE活用を関連させるために、マンダラートに単元のまとめを記入させそれを新聞に反映させようとしたが、上手く活用しきれなかった。どちらか一つの手立てのみでは本実践の力の育成は期待できず、多面的・多角的な考察に

は結びつかなかった。二つの手立てを上手く関連させることは重要であり、その点に研究の余地を感じた。今後2つの手立ての接続の仕方を研究していく必要がある。

VIII 終わりに

本研究では、多面的・多角的な考察する力を育てる社会科教育のテーマの基、「マンダラート」「NIE活用」二つの手立てを軸に授業実践を行ってきた。この二つの手立ては、社会科だけでなく、道徳や特別活動でも活用出来る手立てである。社会科だけでなく、様々な分野に活用出来るよう、本実践で得た成果と課題を活かし、取り組んでいきたい。初めての実践は、課題ばかりで生徒に助けられて成り立った授業実践である。本研究の成果と課題だけでなく、教師として生徒と向き合う中で得た自身の成果と反省をより活かし、生徒の実態を踏まえた指導を行うことができるよう努力し続けていきたい。社会的事象を様々な視点から捉え、様々な立場に立って考えるという「社会科の面白さ」を伝えることはもちろん、学ぶことの面白さを伝えることができるような授業実践が行えるよう自身の学びを深めていきたい。

〈引用・参考文献〉

- ・今泉浩晃『「成功」を呼び込む9つのマス』全日出版、2004年
- ・今泉浩晃『「超メモ学入門」マンダラートの技法』日本実業出版、1988年
- ・土屋武志『いつでも・だれでも・どこでもNIE楽しく気軽にできる授業のヒント』明治図書、2017年
- ・「社会科教育」編集部『平成29年度版学習指導要領改定のポイント』明治図書、2017年
- ・日本NIE研究会『新聞で育む・つなぐ』東洋館出版社、2015年
- ・文部科学省『中学校学習指導要領解説 社会編』、2017年
- ・文部科学省 中央教育審議会『社会・地理歴史・公民ワーキンググループにおける審議の取りまとめについて』、2016年

付記

本研究は、愛知教育大学教職大学院の実習の一環として、連携協力校で行わせて頂きました。ご多忙にも関わらず、教師力向上実習Ⅰ・Ⅱやサポーター活動では、連携協力校の校長先生、指導教諭をはじめ多くの先生方にご指導いただき、大変お世話になりました。また、NIEを活用するにあたり、中日新聞社 NIE 事務局の方々にもご指導頂きました。心から感謝申し上げます。最後になりましたが、教職大学院に在学した2年間でお世話になった伊藤幹夫先生、瀧田健司先生をはじめ、多くの先生方に心から感謝申し上げます。教職大学院だからこそ、得られた貴重な経験を活かし今後も努力していく所存です。ありがとうございました。